様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０３９０

研究課題名（和文）「正常化」時代のチェコスロヴァキアにおけるジャズ・セクションの活動について

研究課題名（英文）Reconsidering the Activities of the Jazz Section in "Normalized" Czechoslovakia

研究代表者
赤塚　若樹（Akatsuka, Wakagi）

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：８０４０４９５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：「正常化」時代のチェコスロヴァキアにおいては、当時の文化政策に従わない芸術家とその作品は存在が公式には認められなかったが、音楽家ユニオンのジャズ・セクションは、活動停止に追い込まれるまで、そういった好ましからざる芸術家の作品を「正式」なものとして普及させることに尽力した。本研究はジャズ・セクションが音楽だけでなく、美術、文学、演劇といった他の芸術ジャンルにおいても行なったそのような活動を検証し、あわせて当時の芸術の状況についても明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In Czechoslovakia during the "normalization" era, in which artists and their works that did not comply with the then cultural policy were not officially approved, the Jazz Section of the Musicians' Union made efforts to disseminate the undesirable artists' works as legitimate and official ones until the Jazz Section’s forced dissolution. This study has examined the activities of the Jazz Section, which includes not only music but also other fields of art, such as literature, theatre, fine and plastic arts, elucidating the circumstances of art at the time.

研究分野：表象文化論、映像文化論、比較文学

キーワード：表象文化論　音楽文化論　東欧文化　ジャズ　現代アート　比較文化　ポピュラー音楽　美術史

１．研究開始当初の背景

まだ冷戦時代にあった 1986 年 9 月、当時東側、すなわち社会主義陣営に属していたチェコスロヴァキアで、音楽家ユニオンのジャズ・セクションの要職にあったメンバーが「認可されていない商業活動」に従事したかどで逮捕された。西側ではこれにたいする抗議の輪が拡がっていき、中東欧関連の雑誌をはじめとする各種メディアでも報道された。とくに音楽家、芸術家たちがこの事件に高い関心を寄せ、アメリカの著名な作家・芸術家・音楽家がチェコスロヴァキア政府に、イギリスの著名な音楽家たちが当時のチェコスロヴァキア大統領にそれぞれ請願書を送るということもあった。

ジャズ・セクションの創設は 1971 年で、当初その関心はジャズという領域に限られていた。ところが、数年後にはロック、ジャズロック、ブルース、ソウル、現代音楽といった音楽のジャンルを横断していき、さらには芸術のジャンルまで越えて、音楽のみならず文学、演劇、造形芸術などにも拡がっていった。しかも「合法的な組織」としての特権を活かしてジャズ・セクションは、出版という手段までも利用して、当時の社会主義芸術の枠に収まらない創り手や作品を支援していった。当局側がこのようなことをいつまでも許すはずもなく、やがて前述の事件が起き、ジャズ・セクションは活動停止を余儀なくされた。

この出来事については、その後チェコ本国をのぞくと、一般の人びとはいうにおよばず、音楽家や芸術家たち、さらには中東欧の歴史や文化の研究者たちからも忘れられていた。日本ではコアなジャズ愛好家たちや中東欧文化に関心を寄せる者たちのあいだでも、この出来事はもちろん、ジャズ・セクションそのものについてもほとんどまったく知られていなかった。そのような状況のなかでわたしはジャズ・セクションについて調べ、その活動のあらましを当時の社会状況とともに素描する論文（「〈グレー・ゾーン〉に生きる芸術――「正常化」時代におけるジャズ・セクションの活動について」、『思想』2012 年第 4 号）を発表した。そのさい、「正常化」時代のチェコスロヴァキアの芸術シーンにおいてジャズ・セクションが行なった活動についてはいずれきちんと検証しなければならないと思うにいたった。

本研究を計画・構想した背景には以上のようなことがあった。

２．研究の目的

「プラハの春」弾圧のあとに訪れた「正常化」時代のチェコスロヴァキアにおいて、上記のようにジャズ・セクションは法の隙間を縫うようにして、当時のオフィシャルな社会主義芸術の枠には収まらない――ときに「堕落した芸術」とみなされるような――創り手の作品を「正式」なものとして普及させる活動に力を注いだ。しかもその活動はジャズにとどまるものではなく、音楽のジャンル、さらには芸術のジャンルをも横断するものだった。そのために弾圧・迫害され、活動停止へと追い込まれるが、創設から解散にいたるまでの 15、6 年間にこの団体がチェコスロヴァキアの「公式の」芸術シーンで果たした役割はあまりにも大きなものだった。本研究は、その活動を徹底的に検証することを第一の目的とし、あわせて「正常化」時代のチェコスロヴァキアにおいて芸術が置かれていた状況についても明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

本研究においては以下の 4 点を中心的テーマとみなし、研究期間全体をとおして検討することとした。

（1）1971 年から 1987 年までのジャズ・セクションの活動をあとづけ、その全体像を浮き彫りにすること。「プラハの春」弾圧後、チェコスロヴァキアではそれ以前にあった芸術家同盟がすべて解体され、「正常化」の名の下に党主導で新しい音楽家ユニオンが創設された。そのさいの内務省の通達を音楽家ユニオン側が都合よく解釈した結果としてその内部にジャズ・セクションが設置された。このようにそもそもの始まりからして 、ジャズ・セクションは「正常化」の産物以外の何ものでもなかった。こうした点に見て取ることができる歴史性を重視しながら、ジャズ・セクションの活動の全体像をきちんと記述し、社会主義体制下で芸術が置かれていた状況の一端を明らかにするようにした。

（2）ジャズ・セクションの出版活動が当時のチェコスロヴァキアの芸術シーンにおいて担っていた役割を分析すること。当時の芸術政策からすると地下出版でしかあつかえなかったような作品が、会員限定のものだったとはいえ、ジャズ・セクションの出版物というかたちで「正式」なものとして公表された。音楽、造形芸術、文学、演劇といった多様なジャンルの芸術作品をこのように「正式」な出版物というかたちで提示し、残したことがジャズ・セクションの活動の最大の特徴であり、最大の功績であると考えることもできる。収集した個々の出版物について芸術的観点、ならびに歴史的・社会的・政治的観点から当時それがどのような意味を持ったのか、どのような影響を及ぼしたのかを検討した。

（3）ジャズ・セクションの本来の領分であるジャズならびにポピュラー音楽が社会主義体制下でどのような状況に置かれていたかをその活動をとおして分析すること。チェコ・スロヴァキアのみならず、中東欧全般のこのようなポピュラー音楽文化にかんする研究はたいへん立ち遅れており、本研究テーマにはそうした遅れを補うという意

味あいもあった。ジャズ ・セクションが企画・開催し、国内外の音楽家の交流の場にもなった音楽祭は、ジャズだけでなく、パンク・ロックなど現代のさまざまなジャンルの音楽をも取り込んだ。これがきっかけとなり、当局側はパンク、さらにはロック全般を激しく非難しはじめ、ジャズ・セクションとの論争に発展していった。音楽関連のこうした出来事を、西側の音楽情勢や東側の政治的・社会的状況も視野に入れながら検証した。

（4）主要メンバーの逮捕・拘留からその裁判を経て、強制的な活動停止へといたるまでの、1986-87 年のジャズ・セクションの事件を文化的観点ならびに歴史的・政治的観点から検証すること。社会主義体制と芸術の関係を象徴的にしめすものとも考えられるこの一連の出来事は、まさにそれゆえに扱いにくい部分もあるが、ジャズ・ セクションの活動の文化史的位置づけという観点から考察するようにした。またこの事件はソ連でペレストロイカ、グラスノスチといった改革が推進されていった時期に重なっており、このことが事件とその裁判にどのように影響したのか、あるいはさらに「衛星国」の芸術にいかなる意味を持ったのかという点も考慮するようにした。

４．研究成果

（1）研究成果として本テーマにかんする論文を 3 本発表した。① 2014 年度に発表した「ロックの詩とともに」では、ジャズ・セクションが当時、自由を象徴する新しい音楽としてのロックを芸術叢書「ジャズペティト」などを通して積極的に紹介していた事実に注目し、資料の分析を通して、ロックの歌詞の翻訳が当時は文学的にも政治的にも大きな意味を持っていたことを明らかにした。② 2015 年度に発表した「芸術家の「状況」」では、現代美術に特化したジャズ・セクションの叢書「状況」で取り上げられている芸術家とその作品を、同時代の「 西 側」の芸術の動向を視野に入れながら検討し、当時の政治的「グレーゾーン」でなされた、芸術の先端的な試みがどのようなものであったのかについても検証した。③ 2017　年度に発表した「ジャズとそのコンテクストにかんする覚え書き」では、社会主義圏でジャズという音楽が一方では嫌悪や拒否に、他方では強い関心や支持に結びつく特別な意味を持たざるをえなかったことを論じた。音楽の流行りが変わっていくなかでジャズとロックは相容れないふたつの文化を形成していたが、ジャズ・セクションが両者の幸福な出会いを演出し、それがジャズロックの興隆につながったこともこの論文のなかで検討した。そこではさらに 1970 年代半ば以後のチェコスロヴァキアのオルタナティヴ文化を担う世代がジャズ・セクションを中心に形成されたことも明らかにした。

（2）とくに 2014 年度と 2015 年度はジャズ・セクションの出版活動を検証するためにその出版物の収集に努めるようにした。その結果、ジャズ・セクションが刊行した二大叢書、すなわち多様なテーマをあつかうジャンル横断的な芸術叢書「ジャズペティト」（全 24 巻）と現代美術に特化した叢書「状況」（全 15 巻）を全巻揃えることができた。とりわけ「状況」叢書はほとんどの巻が市場に出回らないため、全体が把握できるようになったことは、ジャズ・セクションの活動だけでなく、「正常化」時代――とりわけ 1970 年代の終わりから 1980 年代はじめにかけて――のチェコスロヴァキアの芸術シーンのあり方を知るうえできわめて大 き な意味を持つように思える。

（ 3）本研究を進めていくなかで、関連する諸領域、とりわけチェコ文化についても研究成果を発表することができた。まずシュルレアリスムを代表する詩人ヴィーチェスラフ・ネズヴァルの小説『少女ヴァレリエと不思議な一週間』を翻訳・紹介した。ネズヴァルと、同じく代表的なシュルレアリストであるインジフ・シュティルスキーの作品を『性の夜想曲――チェコ・シュルレアリスムの〈エロス〉と〈夢〉』 という標題の下で独自に編集し、翻訳・紹介した。ほかに映画作家ヤン・シュヴァンクマイエルの映画『アリス』の作品世界が「子供部屋の想像力」によって成り立っている事実を明らかにする論文を発表した。チェコスロヴァキアのアヴァンギャルド映画作家・写真家アレクサンドル・ハッケンシュミートがアメリカに渡ってからの活動を、とりわけマヤ・デレンとのコラボレーションならびにさまざまなキーパーソンとの出逢いという観点からあとづける文章も発表した。

（ 4）具体的な論文というかたちでは成果発表には到らなかったが、たとえば、ジャズ・セクションが主催した国際的な音楽祭「プラハ・ジャズ・デイズ」が具体的にどのようなものだったのか、そしてそれが「正常化」時代においてどのような役割を果たしたのか、あるいはさらに、第二次世界大戦以前のポピュラー音楽界で活躍した作曲家ヤロスラフ・イェジェクがジャズの伝統にどのような足跡を残したのか、といったテーマについても研究を進めた。科研費の研究期間は終了したが、ジャズ・セクションについてはまだまだ検討すべき問題が数多く残されている。たとえば上記のような関連するテーマについては今後も機会をみつけて論文を発表していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 11 件）

① 赤塚若樹.「ジャズとそのコンテクストにかんする覚え書き――「正常化」時代のチ

ェコスロヴァキアにおけるジャズ・セクションの活動について（４）」.『人文学報』第514-10 号．2018 年 3 月．1-11 頁．査読なし.

② 赤塚若樹.「米原万里ブックガイド」のうち 8 冊担当(『不実な美女か貞淑な醜女か』、『ガセネッタ＆シモネッタ』、『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』、『真夜中の太陽』、『オリガ･モリソヴナの反語法』、『真昼の星空』、『打ちのめされるようなすごい本』、『言葉を育てる　米原万里対談集』).『文藝別冊 米原万里――真夜中の太陽は輝き続ける』（KAWADE 夢ムック）．河出書房新社．2017 年 8 月．227-228, 229-230, 230-231, 231, 233-234, 234, 236-237, 239-240 頁．査読なし.

③ 赤塚若樹.「「不定形（アンフォルム）」のヴィジョン――黒坂圭太『陽気な風景たち』（2015）について」.『人文学報』第 513-10 号．2017 年 3 月．1-27 頁．査読なし.

④ 赤塚若樹.「クールな頽廃美の調べ」(「クエイ兄弟 ファントム・ミュージアム」展レビュー).『美術手帖』1044 号．2016 年 11 月．184-185 頁．査読なし.

⑤ 赤塚若樹.「21 世紀のシュルレアリスト、ヤン・シュヴァンクマイエル」.『ユリイカ』第 48 巻第 10 号（2016 年 8 月臨時増刊号／総特集「ダダ・シュルレアリスムの 21 世紀」)．358-370 頁．査読なし.

⑥ 赤塚若樹.「アレクサンドル・ハッケンシュミートをめぐる覚え書き――マヤ・デレンとのコラボレーションとアメリカでのさまざまな出逢い」.『れにくさ』第 6 号．東京大学文学部現代文芸論研究室．2016 年 3 月．79-90 頁．査読なし.

⑦ 赤塚若樹.「芸術家の「状況」――「正常化」時代のチェコスロヴァキアにおけるジャズ・セクションの活動について（３）」.『人文学報』第 512-10 号．2016 年 3 月．1-28 頁．査読なし.

⑧ 赤塚若樹.「優雅な狂気、ヴァンプなアリス」.『ユリイカ』第 47 巻第 9 号（2015 年 7 月臨時増刊号／総特集「金子國義の世界」)．124-132 頁．査読なし.

⑨ 赤塚若樹.「ロックの詩とともに――「正常化」時代におけるジャズ・セクションの活動について（２）」.『人文学報』第 506 号．2015 年 3 月．1-17 頁．査読なし.

⑩ 赤塚若樹.「ヤン・シュヴァンクマイエルと「アリス」、あるいは子供部屋の想像力」.『ユリイカ』第 47 巻第 3 号（2015 年 3 月臨時増刊号／総特集「１５０年目の不思議の国のアリス」)．228-241 頁．査読なし.

⑪ 赤塚若樹.「グロテスク・リアリズムの感性――黒坂圭太の映画『緑子／MIDORI‐KO』をめぐって」.『PHASES』第 5 号．2014 年 11 月．70-90 頁．査読なし.

〔学会発表〕（計 3 件）

① 赤塚若樹.「黒坂圭太‐不定形なドローイング　映像作品「不定形シリーズ」をめぐる対話」（トークの相手として出演)、日本映像学会ショートフィルム研究会主催、シアターカフェ（名古屋)、2018 年 2 月 18 日.

② 赤塚若樹.「古川タク インタビュー「僕は今でも前衛だ！」」.『ラッピーニュース』(広島国際アニメーションフェスティバル フェスティバル日報）第 4 号（2016 年 8 月 21 日)．4 頁.

③ 赤塚若樹．黒坂圭太「少女ヴァレリエ展」（『少女ヴァレリエと不思議な一週間』刊行記念)，会期中イベント「黒坂圭太と少女ヴァレリエ」のトークショーに出演．ポレポレ坐（東京・東中野)．2015 年 2 月 20 日.

〔図書〕（計 4 件）

① （分担執筆）『東欧の想像力――現代東欧文学ガイド』.奥彩子･西成彦･沼野充義編．松籟社．2016 年 1 月．担当個所：赤塚若樹.「ミラン・クンデラ」．82-83 頁.

② （編集・翻訳）ヴィーチェスラフ・ネズヴァル／インジフ・シュティルスキー『性の夜想曲――チェコ･シュルレアリスムの〈エロス〉と〈夢〉』．赤塚若樹編訳．風濤社．2015 年 6 月．総ページ数 192 頁.

③ （翻訳）ヴィーチェスラフ･ネズヴァル『少女ヴァレリエと不思議な一週間』.赤塚若樹訳．風濤社．2014 年 12 月．総ページ数 257 頁.

④ （分担執筆）『カタストロフィと人文学』．西山雄二編集．勁草書房．2014 年 9 月．担当個所：赤塚若樹.「カタストロフィのイマジネーション――様式、遊戯、距離」．249-277 頁.

〔その他〕

ホームページ等

http://www.asahi-net.or.jp/~tt2w-aktk/

６．研究組織

(1)研究代表者

赤塚　若樹（AKATSUKA, Wakagi）
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号：80404953